

インタビュー 菊地重仁氏に聞く

聞き手：『クリオ』編集部

2023年3月7日、菊地重仁准教授の就任を記念しクリオの会主催のインタビューを実施した。当取材は東京大学西洋史学研究室で実施され、編集委員らの出席のもと終始和やかな空気で行われた。

誌面掲載にあたっては必要な加筆・修正を施してある。

クリオ：ではインタビューを始めさせていただきたいと思います。まず、ご自身の研究についてということで、今現在の研究内容の概要を教えてください。

菊地：答える前にちょっと聞いてみたいのですが、僕は何の研究者だと思われているのでしょうか。新任だからあまり知られていないかもしれないけれど。

須田：フランク王国の授業を先生がやられていたので、フランク王国の辺りっていう...

菊地：そうですね、フィールドはそう、フランク王国になります。とりわけカロリング期のフランク王国になります。あまり僕の研究テーマについてのイメージはないようで、実は僕自身もそうだったのですが（笑）、新任の年だったこともあって、何回か自分で研究を振り返るタイミングがありました。自分がこれまでやってきた研究というのは、フランク期の政治文化に関する研究が多かったんだな、と今は思います。博士論文も僕の中では制度史ではなくて、どちらかという政治文化史寄りなんです。カロリング期の君主の使者について、制度という言葉は使わないほうがいいんじゃないか、制度の盛衰の叙述ではだめなんじゃないか、というスタンスで、各君主それぞれの代理人の任用の様だとか、彼らにとってそもそも代理人とはどういう存在だったのかといったことを書きました。

そうした流れがあったうえで、いま取り組んでいるテーマというのはいくつかあります。一つは古文書学的、文書形式学的な関心から始まったものですが、威嚇というものについていろいろな角度から考えてみようとしています。文書形式学的な関心から始まったというのはどういうことか。フランク期の私文書であれ公文書であれ、そこに書いてある内容について、何かそれに反することをを行った者にはこれこれこういう罰が与えられるだろうというような文言が含まれています。それが神罰であったり、あるいは公権力による罰金の付加であったり、大きく分けてそういう類型があるわけですが、そういう文言の使い方、その盛衰を見るっていうところから始まって、軍事的な威嚇だとか、あるいは訓戒として、自分に付き従う者たちを教化するための威嚇、教育的威嚇とでも言えるようなものだとか、いろんな威嚇のあり方というのを見えています。とはいえ威嚇や脅しは、それが威嚇だとか脅しだとかと認識されないと意味はないですよ。ホニャララしちゃうぞって言ったって意図が伝わらずボカーンとされているようでは威嚇にならないわけだから、ある一つの文化の中で何が威嚇になって何がならないかっていうような共通のコードはあるはずで、そういったものを考えてみたいというところから取り組んでいるのが、威嚇の文化の研究ということになります。

もう一つ、今一生懸命やっているのは、法とか様々な規範について、フランク期の法文化についての研究です。フランク王国も当然一つの政治体なので様々な法だとか訓告だとかが発せられたわけですが、そうしたどんどん新しく出てくる法やその他の規範テキストと、過去にす

でに出ているそうした法・規範テキストというのが、組み合わせられて一つの手稿本の中に収録される、と言いますか、同時代人たちがあるものとあるものをなんらかの意図をもって組み合わせられて収録するわけですね。場合によってはそれに様々な装飾を施したり、あるいは手稿本作成者が重要だと思ったテキスト箇所など特定一部のフォリオには挿絵なんかを挟み込んだりもしました。こういったコーデクスを、法とか規範テキストの集合写本と呼ぶ人もいます。僕は手稿本というような呼び方をしていますけれども、それはなぜならばただ写しているだけじゃなくて、手で書く（描く）ことで何か新しいものを生み出していると考えているから、こちらの言葉のほうが良いだろうと思っています。ともあれ、そうした法・規範テキスト手稿本というものをそれぞれ一個のものとして様々比較してみるというプロジェクトを、ヨーロッパやアメリカの研究者と日本の歴史家および美術史家の方々に集まっていたいて、共同研究としてやっています¹。目的は単に個々の法・規範テキスト手稿本を分析する、ということではありません。それぞれの手稿本には、時間的にも地域的にも、拠って立つ権威やエスニシティに関しても、さまざまな特徴を持った多様なテキストがさまざまに組み合わせられて収録され、さらに視覚的特徴をも備えたりしています。こうした手稿本の作成、利用の様を分析することを通じて、フランク社会における法文化の、これまで見えていなかったような側面を明らかにできれば、と考えています。これは現在進行中で、1、2年のうちに国際シンポジウムをやって論集を出すというところまで持っていこうとしています。

これらの威嚇についてのもの、法文化についてのものが、僕がいま主体的に動かしているプロジェクトで、あとはいろんな方に声をかけていただいたプロジェクトの中で様々な方向に手を広げているというところですね。

修道制の話もここ数年やっております。これは今都立大にいる大貫（俊夫）さんから声をかけていただいて取り組み始めたものですが、彼の論集には、カロリング期の修道士たちがどのように司牧に関わったのかという問題について書いたものを寄稿しました。あとはその大貫さんのプロジェクト²をきっかけとして知り合ったドイツ、ドレスデン（工科大学の比較修道制研究所）の研究者たちがおりまして、さらに彼らを経由して知り合ったクロアチアの研究者とも一緒になって準備している論集というのが、修道制における合意形成、コンセンサスの問題、修道院共同体あるいは修道会共同体の中におけるコンセンサスとオーソリティの問題を検討するというプロジェクトです。もう既に1回目のカンファレンスは終わり³、論集の準備が始まっておりますが、延長戦としての第2回カンファレンスも決まり、論集のボリュームが大きくなりそうです。ちなみにこのコンセンサスだとか合意形成の話ですが、政治的な領域での合意形成、あるいは政治的な意思決定におけるコンセンサスについては、博士論文以来ずっと意識して史料を見てきていまして、それは別の、河原温先生の科研グループで引き続き研究を続けています⁴。

¹ 「西欧初期中世法文化の形成と変容に関する研究：フランク期法・規範史料の『文脈化』」／“The formation and transformation of European legal culture(s): Contextualizing normative sources from the Frankish period (5th-10th century)” (JSPS 課題番号 19KK0014)

² 現在進行中なのは「観想修道院による『典礼空間』の形成に関する総合的研究」(JSPS 課題番号 20H05719)。

³ <https://www.hsozkult.de/event/id/event-113247> ; <https://www.hrstud.unizg.hr/en/?@=21gml>

⁴ この科研費による研究プロジェクトはインタビュー直後の3月で終了し、4月からは藤崎衛氏（東京大学）を代表者とした後継プロジェクト「中世ヨーロッパにおける多数決原理の形成に関する多角的実証研究」(JSPS

立教大学の小澤（実）さんのプロジェクト⁵にも関わらせていただいていたので、そこで新たに手をつけたテーマってというのは海ですね。今、カロリング朝のフランク王国という陸上の国を、海という視点からどのように見られるかな、ということはいろいろ考えています。このプロジェクト関連の口頭発表では、陸に生きている人たちが海の世界、あるいは海の世界に生きる人々、あるいは海の向こうの世界や人々ってものをどう認識していたのかということについて、史料を検討してみるってことをやりましたけれども、それに加えて今後は、カロリング朝フランク王国に接する海域世界そのもの、それを地域史的に見てみようというふうには考えているところです。特定の海域を定めて、ですね。これらが今取り組んでいるテーマでしょうかね。

クリオ：ありがとうございます。ご研究の範囲はかなり広い範囲だと思われるのですが、まずご自身で主体的に取り組まれている、威嚇の研究とまた法や規範の手稿本に関する研究ですが、どのような問題関心を持って取り組まれているのか、或いはご自身の研究のきっかけなどを教えてください。

菊地：そうですね、文書形式学的なものに関心を持つようになったのは、一つには僕が大学院の修士課程から博士課程、つまり留学前にまだ日本にいる間にちょうど助教に千葉敏之さんがいらっしゃったり、あるいは講師として加納修先生がいらっしゃったりしたことがきっかけですね。その頃いわゆるマールブルク学派、マールブルク大学にいたペーター・リュック Peter Rück の、文書の持つ象徴性っていうのを強調した新しい文書形式学っていうのが非常に勢いを持っていました。またそれに先立つウィーン学派の文書形式学も、文書の中に込められた様々なメッセージを読み取ろうとする試みでした。それらをお二方が日本にも紹介しつつ新しい研究を生み出すということをやっておられて。そういう方々からいろいろ学んで、ああ、文書形式学っていう面白いものがある、何か単に古いタイプの史科学とは違った、史料のメッセージ性っていうのをいろいろ読み取れるそういう史科学があるんだっていうのを学び、それを自分の修士論文に活かそうとしたんですね。その当時は王権理念なるものを考えようとしていたんですが、——これをインタビューに収録するのは非常に恥ずかしいんですけど——僕はその修士論文では博士課程に上がれなかったんですよ。そのときに、王権理念の論文としては駄目である、と、当時の指導教員である高山先生に言われたのですが、その時にポロッと先生が、古文書学の論文ならともかく、というようなことをおっしゃっていたんですね。でも学生の頃の自分にとっては、この論文は駄目であるというその結果の方が、非常に大きな重みを持っていたので、次の年、博士課程に再チャレンジするときは全く別のテーマで書き、それは博士論文の核の一つになりました。それで王権理念を文書の中の文言から読み取るというようなアプローチはほったらかしていたのですが、留学してから副専攻として文書形式学を勉強していたので、そのゼミ用に話を組み変えて調査も新たに直して発表したら、結構受けが良かったので、それならそれこそ高山先生に言われたように文書形式学の論文にしておこうと取り組んだのが僕の 1 本目の論文ということになります⁶。

課題番号 23H00681) が始まった。

⁵ 「前近代海域ヨーロッパ史の構築：河川・島嶼・海域ネットワークと政治権力の生成と展開」（JPSP 課題番号 19H00546）

⁶ Shigeto Kikuchi, “Representations of monarchical “highness” in Carolingian royal charters”, *Problems and Possibilities of Early Medieval Charters*, ed. by Jonathan Jarrett & Allan Scott McKinley (International Medieval Research 19), Turnhout:

そうやって、ザッハリヒに法的行為を記録している文章という体裁をとっていながらも様々なメッセージ性を含んでいると考えられるようになった文書史料から、いったい何を読み取れるのかっていうことを一生懸命考えているうちに、王権理念的な、君主文書から読み取れるものの他に、私文書の方でも何かあるんじゃないか、と気づいたのが威嚇文言、刑罰条項の問題だったっていうところですよ。

クリオ：ちょっとよろしいですか。話の流れ的にいま聞いておいた方がいかなと思ったんですが。今ちらっと院試の話、修士論文の話が出ていたのでお聞きします。菊地先生が着任される前から Research Map を見たりしたんですけれども、向こうで Ph.D.をとって、ドイツ語で単著を出されてと、輝かしい、すごく順調な経歴を持たれていると思っていたので、菊地先生は修士論文1回目が駄目だったっていうのがすごく驚きでした。多分今の若手研究者が気になるのは、先生方が学生だったときはどうだったんだろう、ということかと思うので、卒業論文それから修士論文の先生方からの評価というのはどのようなものだったのかということをお伺いしたいんですけれども。

菊地：さすがに恥ずかしいので、詳しいところは省きます。ともかく大変できる人たちに囲まれて、何とかかんとか生き延びてきたという感じですので、自分のキャリアが順調だと思ったことはありません。結果として（研究者として、大学教員として）今ここにいるということで、先ほど述べられたようなイメージを持たれるということはありませんと思うんですけど、自分のキャリアが順調だとは思っていません。かといって自分は苦労したよっていう苦労話をしたいわけじゃないんです。そうではなくて、自分は（職業）研究者になれる、みたいな自信を持ってずっとやれていたわけではない、ということです。付け加えれば、いまだに研究者としての力量には自信がありませんので、周りの人たちからも刺激を受けつつ、日々精進していかなくてはなりません。

クリオ：個人的にはそこがすごく知りたかったんです。僕から見たらすごく順調に見える人が、自分が研究者になれると思ってずっとやってきたのか、そこがすごく気になっていて。ありがとうございます。

次は法・規範テキストの手稿本についての研究のきっかけについて伺いたいと思います。こちらの方も文書形式学からの流れになるのでしょうか。

菊地：基本的に博論からの派生ということになるかと思います。博士論文では、先ほども言いましたけれども、カロリング期の君主の使者たちのことを論じたわけです。その使者たちが行政的な役割を果たすときは、王の権威を背景にした何らかのテキストを宮廷の方から地方の方に持っていく。これは彼らの機能の一つだったわけですが、そのとき、何か新しく規定が定められて、それを逐一持っていくっていうだけにとどまりません。中央から地方へ動いて何かを布告しそれを貫徹させる、そしてその行き先であった地方からまた中央へ、場合によっては別のテキストを、例えば調査結果を持って戻るといったような、行政上の任務を負った旅ですね。そのときに、

Brepols, 2013, pp. 187-208 を指している。実際は2012年に別の論文（“Carolingian capitularies as texts...”）が先に刊行されたが、元となった報告をした2011年7月の International Medieval Congress が、後者の原型を報告した第12回国際研究集会『歴史におけるテキスト布置』（2011年9月）に先行するため、菊地の中では“Representations”論文が1本目だという誤認が生じているようだ。

新しく出されたテキストだけではなくて複数の、別のテキストも用いられていたわけです。新しい規定だけを持っていたのではなくて、ここで新たに確認されたのは前に出たこういう規定のことなのであるというふうに書いてあることもあれば、前に決めた通りやるべしみたいに、もう具体的なことが全く書いてないようなこともある。そうしたときには以前のテキストを何らかの形で参照しなければ仕事にならないわけですね。ということはその一回の任務のために、一件書類的なものが作られたのかもしれないし、あるいはリファレンスブックなものみたいなものを手元に持っていていったのかもしれない。博論では一件書類の方を考えて書いたんだけど、実際に我々のところに伝来しているものっていうのは、それ（＝一件書類）を他のものとさらに結合した一つの手稿本なわけですね。博論のときにはそうした個々の手稿本の分析までは手を伸ばせなかったので、今度改めてそちらを検討してみよう、と。そういうふう考えたときに、手稿本においては、単にそのテキストが結合されているだけではなくて、様々な手も加えられているわけですね。装飾だとか、挿絵だとか、あるいは法テキスト以外のテキストも同時に差し込まれたりしている、全体として一つの書物のようなものになっている、っていうことを考えなくてはいけないときに、もっぱらテキストを追い、分析している歴史家だけではなくて、美術史研究者の方々と協働すべきだろうというふうに考えた。そういう流れです。

クリオ：ありがとうございます。

岡本：海の認識に関するテーマについても、先ほど地方っていう話もちっとでましたけど、何かそこから派生したものだったりするのでしょうか。それとも何か他の研究者との交流の中で関わるようになったものなのでしょうか。

菊地：海とか川を考えてみましょうというようなきっかけ自体は、先ほども言及した小澤さんの企画にお声掛けいただいたときに得られたもので、（海の認識に関するテーマは）じゃあ自分はフランク期の史料で何ができるだろうか、と、いろいろ考えていつて思いついたことになります。それについて面白かったのは、海のイメージについて（2020年の）日本西洋史学会大会のシンポジウムで話したことを、その当時コロナ禍だったので、前年に在外研究で行っていたベルリン自由大学のゼミナール——その年も引き続きオンラインで参加していたんです——でも喋ったら、面白がってくれたアメリカ人がいて、その後、そのアメリカ人が在籍している南カリフォルニア大学のセミナーでも喋ってくれっていうことになったんですね。そうしたら、同じようなアプローチでフランク期の川のイメージってことをやっている大学院生に出会って。彼女の作品ももうすぐ出るのかなと思いますが、同じようなことを考える人がいるんだなと思ってお話ししました。

クリオ：今後取り組みたいテーマなど興味関心や研究の展望等を教えてください。

菊地：そうですね、僕が最終的にやってみたいと考えていることの一つは——たぶんカロリング期に限定せざるをえないとは思いますが——カロリング期のフランク世界というものを可能な限りいろんな角度から検討した総合的な叙述ですね。だからお声がけいただいたプロジェクトには、はい！はい！やりますやります！っていう感じで応じて、（自分の研究に）新しいアプローチ、あるいは新しい視角、視点を取り入れさせてもらったり、自分がこれまであまり取り組んでいなかったテーマに取り組むきっかけを与えていただいたりしているわけです。それが長期的なプランの中でやってみたいことでしょうか。退職する頃までにやってみたいなど

は思いますけれども。

クリオ：ありがとうございます。委員の皆様からはご質問はございますか。

須田：先ほどの美術史家の話や、クロアチアの研究者の方など、いろんな海外の研究者と繋がって研究をなさっているという話に関連してもう少し伺いたいと思います。私はまだ博士課程の1年生なので、国外の研究者と繋がるということにあまりイメージが持てていないのですが、日本で研究をされている菊地先生が海外のいろんな研究者と付き合っていく中でどのように強みを発揮していった、どのようなことをされているのかなと思いました。国際比較のなかで日本のケースをやる、ということであればわかりやすいのですが、必ずしもそういうわけではないかと思います。そうしたなかで日本の研究者ならではの何かがあるのか、あるとすればそれはどのようなものなのか、ということをお伺いしたいです。

菊地：これは非常に難しいことですね。僕が（日本にいる、あるいは日本人だから、という点で）何らかの強みを持っているというように向こうの人たちに認識されているのかというと、あまりされてないんじゃないかなとは思いますが。ただ（僕が）異質な存在であるという目があるのも確かだと思います。僕がドイツ語で書いて出版した本の書評が出始めているんですけど、そうした書評のうちの一つの冒頭に——正確には覚えていないのですが——、ヨーロッパの中世というのは長らく日本人の関心を引くものであるようだが、ここにもまた日本人研究者の本が1冊出た、といったことが書かれていました⁷。だから我々の文化に関心を持つ外の人間、といった目で見られていることはあるのだと思います。我々ではない人間から見た我々の文化っていうのはどう見えているんだろうか、ということへの関心はあるのかもしれないですね。

須田：ありがとうございます。

クリオ：日本の研究者でも現地語で研究を発表・刊行したり、あるいは国際学会で報告したりすることも珍しくなくなりつつある近年の状況のなかで、国際的な学術コミュニケーションが促進されてきているとも考えられるかと思います。そうしたコミュニケーションを取るに当たって、未だに困難だと思う点はあるですか？例えば認識の齟齬があるとか、先ほどおっしゃったような、ヨーロッパの人々が考える「我々」とその外にある（日本の）私というような壁があったりするのかとも思っています。あるいは逆にここがかつてよりは良くなった、例えば先生が最初に留学しに行かれたときと今とを比較してここが良くなった、という点はあるですか？ご自身の留学や在外研究の経験を踏まえて、お話いただければと思います。

菊地：何からどう答えていけばいいのかすごく迷いますね。まず自身の研究を欧米の研究発表プラットフォームの枠内で公表することが特別なことではなくなってきた、ということはとても良いことだと思います。条件面という意味では、僕らの師匠の高山先生の世代の条件に比べたら、僕のとくらで、かなり留学に行きやすくなっていたと思います。もちろん資金を獲得するという点をクリアしないといけないけれども、留学や国際共同研究を支えてくれる仕組みは以前に比べると整ってきている、あるいは充実してきているんじゃないかなと思います⁸。科研費

⁷ 正しくは“Das europäische Mittelalter ist immer wieder ein interessantes Untersuchungsfeld für japanische Historikerinnen und Historiker. Ein Ergebnis bildet auch das hier zu besprechende Buch” だった。

<http://www.sehepunkte.de/2022/12/37246.html>

⁸ 他方でドイツ学術交流会（DAAD）のように財政難から奨学事業の規模を縮小する機関もあり、現状右肩上

でも国際共同研究を目的とした種目ができましたからね。制度面では、どんどん進展してきているんじゃないかなとは思いますが。さらに科研費の国際共同研究を目的とした種目では、プロジェクトとして申請するためには博士号取得後一定年数以内の若手研究者をプロジェクトの中に組み込まなければいけないというような条件が入っているはずですけど、そういう形で国際経験をさせること、戦略的には研究者ネットワークを作りつつある中堅以上の人がそのネットワークを次の世代に継承させていく、あるいはさらに広げてもらうことができるように制度設計されているということは悪いことではないな、というふうに思っております。

あとは一度コミュニケーション・チャンネルができてしまえば、例えばオンライン・ミーティングシステムを使って、打ち合わせも容易にできるわけです。それこそこうした流れはコロナ禍でさらに一気に加速したように思います。こうやって話したところで、今主体的にやっているプロジェクトをもう1つ思い出しました（関係者の皆さん、失礼しました）。「中世における妥協」というテーマで新しくプロジェクトを始めたんですよ。これは去年の秋から2人のドイツ人の研究者と始めたのですが、そのうちの1人は元からの知り合いで、もう1人はその人経由で繋がった人です。きっかけはメールで知り合いのノヴァク *Jessika Nowak* さんと新規企画の案を出し合っている時に、「敵に塩を送る」という表現の話をしたことでした。それで彼女が、「妥協」というテーマのプロジェクトをやろうとしている知り合いがいて、シグトの考えていることとも繋がるから、3人で企画しよう、と。紛争解決だとか合意形成ということはこれまでにいろいろ研究されてきたけれども、中世社会における「妥協」というものはそれ自体として十分に注目されてこなかった。そこで「妥協」という側面に焦点を当てて、様々な場面での「妥協」のあり方というのを検討してみようというプロジェクトが始まったんです。このプロジェクトに関してはドイツ語ベースのワークショップをやっているのですが、参加者は今のところドイツ語を話せる人に限られてしまっているのですが、それでもドイツ人と日本人、しかも歴史とか芸術だとか文学だとかディシプリンは様々で、ヨーロッパ中世研究をやっている人と日本学をやっている人の共同研究という形になっています——こうしてあらためて考えると、やはりネットワーク構築において「日本人だから」ということは意味を持っているようですね——。ワークショップや打ち合わせはこれまで全てオンラインでやっていて、様々な国や地域に住んでいる人が一つの同じワークショップに参加しています⁹。ドイツ人の中でも色々な場所に住んでいる人がいるし、僕や他の日本人研究者は日本にいるわけです。（自分を含めて）3人の主催者がいますけど、そのうちの1人とは1回も会ったことがないんですよ¹⁰。それでも国際共同研究を始めることは可能だし、進めていくことも可能であるという状況になっている。これは今、一気に何か開ける可能性が生まれている状況なんじゃないかなというふうに強く思っていますね。

クリオ：それはやはりコロナが始まってからのここ数年の話ですか？

菊地：そうですね。まず技術的な条件が整ったというところもあるし、皆がオンライン・ミーティ

がりに留学支援環境がよくなっているというわけではない。

⁹ 第1回ワークショップの記録は以下で確認できる。<https://www.hssozkult.de/conferencereport/id/fdkn-133620>

¹⁰ 菊地はノヴァク博士（ブッパータール大学）とも8年以上面会していない。しかしこのインタビューの直後、Jan-Hendryk de Boer 博士（デュイスブルク＝エッセン大学）は田口正樹氏（東京大学）の招聘により来日し、東京および京都で講演会を行った。偶然ながら、同時に来日した Marcel Bubert 博士（ミュンスター大学）もプロジェクトメンバーの一人である。

ングに慣れたというところもあるでしょうね。最初の1年は皆それどころじゃなかったとは思いますが、2年目、3年目と時間が経つうちに、Zoom だとか Webex だとかの使い方にも慣れてきて、オンライン・ミーティングあるいはワークショップのノウハウもわかってきて、(先に述べたようなことが) 成り立つようになってたんじゃないかと思います。

クリオ: ありがとうございます。確かに制度面も整備されてきて、個人的に海外の研究者とやり取りすることも容易になってきたと思いますが、今ここにいる人々は多分、大学院生活を通じてなかなか海外と接点を持っていないと思います。先生の院生時代は、海外の研究者とどのようにコミュニケーションを取っていましたか？

菊地: 都内の先生が海外から研究者を呼んで研究会をやるとなれば、そこに行って何か話して繋がりを作るといったことを、留学前の大学院生は皆さんやってらっしゃったように思います。モノになるものとならないものはもちろんあるでしょうけどね。もちろん僕個人についても、その後には繋がらなかったコンタクトはありました。ともあれ、皆さんも、来日なさった先生とコンタクトを取ってみるのは良いと思います。僕自身の経験としては、ドイツの先生方が駒場に招聘されたときに知り合って、その時に、あるいはその後に留学してから、博論のコンセプトペーパーを読んでいただき、それについてコメントを頂いたことがあります。それらの先生方が留学先での指導教員になったというわけではありませんが、親切にしてくれました。留学に行く前にいきなり海外の研究者たちとコミュニケーションを取るのは今も昔も難しいとは思いますが、そうした(来日の)機会を活用するといいいんじゃないかなと思います。もう一つエピソードを付け加えると、留学先から一時帰国して報告させていただいたシンポジウムの時、同じく登壇者で今は法文化の共同研究をやっているエスダースさん(Stefan Esders)と、予約していたドイツへの帰国便が一緒だったのですが、帰国日に名古屋に台風が来て離陸が遅れ、3時間くらい2人で待合室でお話する機会が得られたんです。機内での読書用に用意していた本が偶然一緒だったりもして、ただ一緒に学会で報告しただけではあり得なかったかもしれないような、今につながる関係が作れたのだらうと思います。こんなふうに、とりあえずなんとか会うきっかけがあれば、偶然が良い方向に道を開いてくれることもありますので、会えるチャンスは逃さない方が良いのではないのでしょうか。

あとは短期で史料調査や語学研修に行くときに、きっかけを作っていくっていうのもありだと思います。その際、いきなり自分でメールを書いて面談を申し込むのがつらければ、どなたかに紹介状書いて頂くか、EメールのCCに入れてもらうような形で仲介を依頼しても良いかと思います。僕が留学先の指導教授になるシーファー先生(Rudolf Schieffer)と最初にコンタクトを取ったときは、先生との間を仲介していただけたようなシュミッツ先生(Gerhard Schmitz)に対する紹介状を西川洋一先生が書いてくださり、語学研修先のミュンヘンでシュミッツ先生と会ってシーファー先生に話を通していただく、という二重の仲介を経た形でした。ありがたい話です。

クリオ: ありがとうございます。ここまでは先生の研究のお話から派生して質問させていただきましたが、今度はもう少し大きく、西洋中世研究に関する課題や展望について伺いたいと思います。

ヨーロッパの人たちが自分たちの地域の中世史を勉強することと、私たち日本人が地理的にも時間的にも離れたヨーロッパ中世を研究することは、かなり違うものだと私は思います。そうした中で、日本で西洋中世史を研究する意義を、先生はどのようにお考えでしょうか？

菊地: とても難しい質問です。難しいというのは、考えていないというわけではなくて、どう答え

る「べき」がまだわからないという意味で、です。ヨーロッパがひとつのモデルとして捉えられていたかつてと今では、大きく（西洋中世研究の）位置づけが変わっています。それでもコミュニケーション・パートナー（としてのヨーロッパの人々、あるいは彼らの文化）のバックグラウンドを知る試みの一つとしての意義は今なお失われていないのではないかと思います。仮に中世という時代が「ヨーロッパ」世界の誕生・揺籃の時期であるならば——これ自体きちんと議論・検証しなくてはならないことですが——、なおさらそうした意義はあるでしょう。あるいは、西洋史学一般に関して、西洋史学研究室のウェブサイトで述べられていることは、西洋中世研究にも当然妥当すると考えられます。つまり、複雑かつ変化が激しく、情報も錯綜する現代社会において我々が有効だと考えている「過去から現在までを複眼的に見通す歴史学の視点」ないし視座の形成への寄与、ということです¹¹。

ところで日本史の人たちと共同研究をやっているところなのですが、我々の西洋中世研究が日本中世史の研究にも影響を与えうると感じています。我々西洋中世研究者も、日本中世研究からいろいろなポジティブな影響を受けていますけれども、共同研究をやっていると、逆に我々が何か提供できているところもあると思っています。したがって我々が「他者」「他所」としての西欧中世を研究していること自体、日本、すなわち我々が活動している地域あるいはその社会の過去を知ることにも寄与するところがあると考えます。間接的ではあるかもしれませんが、そうしたメリットはあるでしょうね。なぜ（西洋中世研究を）やっているんですかと問われたら、根本的には僕を含め皆さんそれぞれの知的関心そのものが、それぞれの（研究の）動機、背景になっているとは思うんですけれども。

長澤：個人的に最近考えていたことだったので、お話を伺えてうれしいです。私自身も西洋中世の研究と日本の中世研究の関わりが最近増えてきていると思っていたのですが、ここで気になったのが、具体的にどのような相互に影響を受けているかということについてです。いまいち、どういう影響を受け合っているかが掴めなくて。

菊地：個人的な経験からお話したいと思います。僕が関わっている共同研究は、史料の比較研究です。留学から帰ってきて最初に関わらせて頂いたのが、西洋史の文脈でいうところの証書、日本史で言うところの証文を中心とした、いわゆる古文書の比較研究で、刊行・校定されたテキストを比較するのではなくて、相互に現物を見ることを重視するものでした¹²。端っこに加えていただいて色々史料を見て解説を聞く機会を与えていただいていたら、同じような売買でも、契約でも、特権や恩賞の付与でも、同じような法的行為をしている場面であっても、それを証明するために使っている文書が、その素材から宛書の書き方から違う、何からどういう順番で書いていくとか、それぞれの要素をどう配置するとか、色々違うわけです。日本側もヨーロッパ側も、それぞれ自分たちの学問的伝統の中で、証文や証書はこういうものであると思い込んで、そこから何か情報を読み取ろうとしていたわけだけれども、その形ではない契約書があり得る、売買文

¹¹ 「グローバル化の波にさらされ、変化し続ける現代社会においては、短期的な現状分析ではなく、過去から現在までを複眼的に見通す歴史学の視点こそが、錯綜する情報を的確に選り分け、長期的展望に立った判断を可能とする。すなわち我々の目指す歴史学とは、悠久の時の流れの中に揺るぎない視座を確保する営みに他ならない。」 (<http://www.lu-tokyo.ac.jp/sciyoshi/guide.html>)

¹² 「古文書学的手法の創造による日本・西欧の社会秩序と封建制移行過程の比較研究」(JSPS課題番号24320121、代表：河内祥輔)

書があり得る、あるいは命令書があり得る、というのがわかってきたときに、あらためて自分たちが持っている史料の「ある部分」と「ない部分」が見えてきて、史料の読み方が変わり得るというところはお互いにあると感じています。これは、僕が日本人として日本中世史の成果を受けて云々というだけでなく、このプロジェクトの中で海外から招聘してきた研究者の方々も、日本の史料を見て着想を得た、というような感じでした。海外の研究者たちもすごく満足して帰っていった、その後も共同研究が続く、というようなこともあるので、(西洋中世研究と日本中世研究との関わりが) 史料の見方にも(相互に) 影響を及ぼしようというところは感じています¹³。なお、この共同研究はターゲットを書状・書簡に移して継続中です¹⁴。

クリオ：ここまで海外との関わり、そして日本で西洋中世史を研究することについてお話して頂き、日本の中世史と西欧の中世史が相互に影響を及ぼし合っている現状をお伺いしました。自分の研究している地域に集中して研究する以外に、もう少し広い視野で見てみることで、いろいろなインスピレーションを受けるなどのポジティブな影響もあると思います。その中で近年ではグローバル・ヒストリーのような視点もあるわけで、世界史という枠組みで見て、さらに多面的に物事を捉えようとする試みもなされていると思います。ただ、グローバル・ヒストリーで歴史を見ることについては研究者の中で賛否もあるわけですが、先生はこういった潮流に対して、どのようにお考えですか？

菊地：皆さんはどうでしょう？グローバル・ヒストリーって普段意識していますか？

岡本：現代史をやっている人間からすると、無視できない側面は必ずあるなと思います。最近ドイツとアジア、ホロコーストと植民地での経験の繋がりだったり、植民地も海外植民地ではなく、隣接する東欧地域を植民地的な視点から捉え直す動きなど、繋げるなら本当にグローバルになり得ますね。故に現代史からすると、アプローチに欠点などはもちろんあるとはいえ、グローバル・ヒストリー自体を否定的に捉える感覚がよくわからないところもあります。中世史だとどうなるのかというのは気になる場所ですね。

菊地：古代史の人たちはどうです？

十川：僕は完全に制度史をやっていて、なかなかローマ史から出られていないので、グローバル・ヒストリーの評価は別にして、グローバル・ヒストリーの考え方自体を自分の研究に活かしていないのが現状です。

蔡：ただ最近だと、おそらく他の時代の歴史研究から遅れてはいるんですけども、古代史でもグローバル・ヒストリーに関連した研究が出てはいます。古代ローマ史では同じ時代の中国古代史の研究者と共同研究したりということも最近ではありますが、現代史に比べればグローバル・ヒストリーに関しては古代史はかなり消極的です。

菊地：なるほど。中世史で言うと、オックスフォード(大学)を中心とした Global Middle Ages と

¹³ 2015 年にドイツ・テュービンゲンで行われたシンポジウムを中心としたこのプロジェクトの最初の成果が以下の書籍として刊行されている。河内祥輔／小口雅史／M・メルジオヴスキ／E・ヴィダー編『儀礼・象徴・意思決定：日欧の古代・中世書字文化』思文閣出版、2020 年。

¹⁴ 「中世の書簡体文書による統治実践と秩序形成をめぐる日欧比較研究」(JSPS 課題番号 17H02377、代表：高橋一樹)

いうプロジェクトとその後継企画が大きな影響力を持っていて¹⁵、日本では小澤実さんがそのプロジェクトを推進する一員になっているという状況もあるわけです。しかし僕自身がグローバル・ヒストリー的な手法を積極的に取り入れられているかということ、これは残念ながら成功しているとは言えない、けれども、こうした動き自体は良いことだと思っています。大きなチャンスとしては、山川出版社から出た『歴史の転換期』というのがあって、僕が一番西側を担当して、ビザンツ、西アジア、中国まで広がる世界を750年という年を一つの軸として輪切りにしたような本を書く機会がありました。当時の僕としては一応、ビザンツ世界だとかイスラーム世界をフランク側がどう見ていたのか、(キリスト教世界の)東側と西側両方がイスラーム世界をどう意識していたのか、さらにはそういったことがフランク世界内部にどのような影響を与え得たのかというような、読書過程あるいは耳学問の過程で得られた問いも考慮しながら、当時の西の方、ヨーロッパ世界になっていく部分というものを考えてみようとしたんだけれども、やはり今振り返ると、まだまだ全然満足いくものではなかったなと思います。例えばフランク期であれば、フランク世界はより東の政治圏・文化圏に比べたらすごく小さな辺境であるということを意識した上でないと、周辺地域との関係性は的確な形で叙述できないということを、日本でも北海道教育大の津田(拓郎)さんが強調されていたかと思いますが¹⁶、そうした意識も僕のテキストでは弱かったなと反省しているところです。ただそうした交流、接続や影響関係もそうだし、あるいは比較もそうだけれど、広い範囲に目を配っているということを意識する、全体を自分でやるのではなくても、(全体ないし広い範囲に目を配ることで)どういう可能性があるかを意識しつつ、自分の専門とするローカルなところに集中した研究、ある意味グローバルな研究のやり方でもいいんじゃないかなと思います。もうグローバル・ヒストリーを無視できないというのは先ほど現代史の人たちが言ってくれた通りだと思う。ただ、自分の研究がそのグローバル・ヒストリーというものに値する研究になってくるかどうかはまた別の話で、僕自身は今のところやれてないけれども、意識はした上でローカルな問題に取り組むべきだと考えています。

クリオ：ありがとうございます。ここまでが西洋中世全般について伺いたいことでした。ここで一旦区切りとして、皆様から今までのお話の中でここを聞きたいなというところはありますか？

奥田：よろしいですか？先生は今日までかなり多くの論文を書かれていると思うんですけど、その中で特に印象に残っている刊行物や論文はありますか？特に苦労したとか、そういうお話が伺えるとありがたいのですが。

菊地：出したものは多くありませんが、その中でも一番苦労したのはやはり単著¹⁷ですね。博論をベースにしたとはいえ、そこから刊行するまでにかなりの時間がかかってしまいました。本当に不徳の致すところなのですけども、刊行準備中にドイツで指導教員だった先生(シーファー先生)が亡くなられてしましまして、刊行された本を見せて差し上げることができなかったことは、今でも悔やんでいます。それでも何とか出せたので、単著が今のところは一番思い入れのあ

¹⁵ <https://globalmiddleages.history.ox.ac.uk>

¹⁶ 津田拓郎「8・9世紀アフロ西ユーラシア世界におけるカロリング朝フランク王国」『史學研究』308(2021)1-38頁。

¹⁷ Shigeto Kikuchi, *Herrschaft, Delegation und Kommunikation in der Karolingerzeit. Untersuchungen zu den Missi dominici (751-888)* (Monumenta Germaniae Historica Hilfsmittel 31), Wiesbaden: Harrassowitz, 2021 のこと。

るものですね。思い入れがあることと出来不出来というのはまた別であって、単著はまだいじりたいところは多々ありますけれども、一番思い入れがあります。

それとは別の意味で思い入れが強いのは、初期の刊行物になりますね。初期の2本はどちらも国際学会で喋ったことを元にした論文です。お恥ずかしい話ですが Research Map でも見られるのでお話ししますと——これは絶対に真似しないよう皆さんにきつく言っておきます——、僕は日本で（論文を）1本も書かないまま留学に行っちゃったんですよ。ですから留学中、日本では、自分が教わった先生方以外、あるいは関わりのあった先輩後輩以外、僕の存在はもう忘れられていた、それどころかそもそも知られていなかったわけです。そうした状況でようやく博士論文提出前後の2012年、13年に（研究成果を）表に出せたという意味では、ようやく何か、研究者になれるのかなというようなことを感じましたね。繰り返しますけれども、皆さんは絶対真似してはいけません。必ず留学に行く前に論文を出してください。

奥田：すいません、不規則な質問だったと思うんですけども、こういうアドバイスは今の若手研究者にとっても有益だと思います。ともすれば国際競争力という観点から、外国語で論文を出す方に目が行きがちですが、日本で忘れられないためにも留学に行く前にちゃんと日本語でも論文書いておくことはとても大事だと思います。

菊地：日本語ではなく外国語で書くということに関しては、今後皆さんがどこを活動の場としていくのかにも関わってくると思います。日本で職を得て日本の学会を足場として、その上で海外の人たちとも交流するのであれば、日本語で研究報告し研究成果を公開することは、決して疎かにしてはいけません。先ほど言った日本における西洋中世史研究の意義という問題にも関わってくると思いますが、実証的な研究を外国語で書いて、それを、括弧付きになるかもしれないけれど「母国」の人たち、すなわち現地の人たちに読んでもらい議論するというのは、学術的な営みとしてはすごく意味のあることだと思います。けれども、そうしたやり方をして、仮に日本の西洋中世研究者たちもそのような対等な議論ができるんだという認識を向こうの人たちに持ってもらったとして、日本の大学業界、あるいはアカデミアの中で、西洋中世研究のプレゼンスが上昇するかどうかという、必ずしも直結はしないと思うんですよ。自分たちのやっている仕事の意義というのを日本の学術界の人たちに、どういうことをやってるのがある程度アクセスしやすい形で知られていないといけないんじゃないかと感じているところです。アカデミアの外側の人々、社会に広く知って欲しいならなおさらです。先ほど述べたような、例えば日本史研究者との共同研究を行いたいという場合でも、日本語で書かれた自分たちの仕事があるのかないのかで、共同研究の実現に至る道のりは大きく変わるでしょう。そういうわけで僕も、議論する相手としてヨーロッパの研究者たちを視界から外したくないので横文字でも書きますけれども、かといって日本語で書かなくていいとは決して思っておりません。何かしらの形で日本語でもパブリッシュしていくことは意識しています。これは周りの研究者、大学教員たちもよく言うことですけれど、西洋中世のことをやっているからといって西洋系の言語でだけ研究成果を出していったときに、新たにその西洋中世に関心を持つ日本国内の学生をどう獲得できるかという問題が出てくると思います。最初に西洋中世に関心を持ってくれる日本在住者というのは、日本語でアクセスできる情報からそこにたどり着くと思うのですが、そのときに良質な研究成果にアクセスできないと、研究しようとは決して思ってもらえませんよね。ですので日本語で良い研究成果を公表することは決して疎かにすべきではないと自分も思っていますし、皆さんも疎かにしないでいただきたいと思います。

奥田：ありがとうございます。

クリオ：大学での講義やゼミの内容や形式についてお話いただければと思います。

菊地：前任校と、今、東大の西洋史学研究室に来てからで変わったのは、まずは講義ですね。実は僕は前任校では特殊講義を1回しか担当したことがなかったんですけど、こちらに来てからはもう每学期特殊講義をやることになるわけで。今の特殊講義では、そのとき自分がアクチュアルに考えているテーマを喋っています。つまり、授業なんですけれども、何かしっかりとまとめられたもの・知識、定説を教授するだけというよりは、一学期の講義を通して自分の思考にまとまりをつけている、つけようとしているというところもあるんです。今年度の最初は、(初期中世の)教皇座の話。それ(に関する論文)は先月、論文集の一部として刊行されました¹⁸。後期は初期中世におけるモビリティというテーマで話していました。このモビリティという点は、さっきのグローバルなところとも絡んできますね。講義では、フランク世界ないしは地中海世界というのを見たとき、初期中世におけるモビリティが社会においてどういう意味を持ったのかという問いについて、本当に半期の流れの中で考えながら材料を集めながら喋っていました。これもカンファレンスでのペーパー準備とか、それを基にした論文の準備とリンクしながらやっています。要するに自分が現在進行形でやっている研究に関わることを講義で話す。そういう、何だろう、研究のアクチュアルな現場っていうのかな、アトリエって言ったらちょっとかっこよすぎるかもしれないけれど、研究の様子を話しながら、一緒に考えてもらうっていう部分を含むのが今のところの講義の形ということになるでしょうか。

あとは学部での演習と大学院の演習ですね。まず学部の演習は、基本的に高山先生、自分の師匠のゼミのスタイルを引き継いでいます。全く中身が一緒というわけではなくて、形式を引き継いでいるということです。つまり学期の中で複数のテーマが設定されていて、そのテーマ毎に2週間使う。1週目はそのテーマに関する概説的なテキストを複数、比較しながら読んでディスカッション。2週目はそのテーマに関する日本語の研究論文を複数読んで比較する。かつて、あるいは近年、どういうテーマが、そしてどのような角度からそのテーマが論じられているのかということを確認しながら議論するという、2週1組のゼミスタイルですね。

高山先生から僕らが教わっていた時代には、1週目の概説テキストとして1冊の本を読んでくるっていうような感じだったんです。ただしそれだと、図書館にその本が1冊しかないのにゼミ生が複数いた場合、全員が借りることはできない、かといって全員買えるかって言ったら、それはなかなか事情に応じて難しかったりするので、もっと短いテキストを複数用意して配布して、というような形に変えました。ただ、スタイルや方針は同じだと思います。

あとは大学院ゼミ。これは留学前の大学院生たちにしっかり史料を読めるようになってほしいと考えてやっています。今年は書簡史料を扱いましたが、年度ごとに史料のジャンルを変えながら、それぞれの史料類型についての基本的な知識をまず踏まえた上で、テキストを実際に輪読してみる。それを前期やった後、後期にはその輪読を続けながら、合間合間で、参加者それぞれの研究フィールドにおけるそのジャンルの史料を使った研究を紹介してもらう、という

¹⁸ Shigeto Kikuchi, “Authority at a distance: popes, their media, and their presence felt in the Frankish kingdom”, *Communicating Papal Authority in the Middle Ages*, ed. by Minoru Ozawa, Thomas W. Smith & Georg Strack (Studies in Medieval History and Culture), London: Routledge, 2023, pp. 13-30.

ようなことをやっていますね。研究紹介と言っても、この論文を読みましょう、という紹介で、結局は研究論文の輪読と議論ですね。要するに大学院の演習は、史料を読んでみる、そしてその類の史料がどう扱われているのかを、先行研究を参考に体験する。そして自分の研究にはどのようにこのジャンルの史料が使えるのか、自分なりのアプローチの仕方、可能性を考えてみる、そういう機会にしています。

須田：大学教育の話が出てきた中で、授業の狙いについてもう少しお聞きしたいです。院ゼミについては史料を読む能力を重視していたかと思うんですけど、一方で講義では、私自身学部の際、講義に出て池田先生、芦部先生、勝田先生の講義を聞いて、「おお、なるほど」となったんですけども、結局これは何を学べって言われているんだらうってことは当時から何かわかるような、わからないような気持ちになっていました。先生方が実際どういうふうなことを狙ってあの講義をされているのかという点について、お伺いしたいと思います。

菊地：なるほど、（ご質問を）ありがとうございます。他の先生方がどう考えているのか、もちろん僕にはわかりません。けれども、先ほども申しましたように僕の講義の場合は、自分がアクチュアルに考えていることについて、考えるための材料としてこうこうこういうのがあって、他の人たちはこう考えてきたところがあります、それに対して自分はこう考えています、というのをいくつか重ねながら一学期の講義を組み立てているつもりです。また最後は、試験ではなくてレポートを書いてもらっています。

僕が話したことを覚えているか覚えていないかを試験で問うのは、非常につまらない。そうではなく、僕が提示した材料はこうです、僕はこう考えています、というところを踏まえてもらった上で、皆さんが何か別に自分たちの関心に沿う本などを読み、僕が喋った内容に同意できるのかできないのかということも含めて、例えばこの間の学期であれば、「モビリティは初期中世のヨーロッパ社会においてどのような意味を持っていたと考えられるか」という問いのかたちで、皆さんの考えを教えてくださいという意図でレポートを書いてもらっています。何だろうな、一緒に考えてみてほしいというところがありますね。

もちろん学部生を対象とした講義なので、専門研究レベルの回答を要求しているわけではありません。でも意外と面白い。例えば、西欧史学特殊講義のレポートなんだけれど、他の専修の学生さんたちも受講しに来てくれていて、彼らが面白い解答をしたりするんですよね。それが新鮮だったりします。これは試験相当物の解答内容なので、もちろんここでは言えませんが、繰り返しますが、一緒に考えてみてほしい、僕はこう考えたけれども、あなたはどうか、を問いたいという考えがあります。それがうまくできているかどうかはまた別の話で、うまくできてないと「へー」で終わってしまうかもしれないので、ここは僕も精進していかなければいけないと思っています。

須田：極めて学問的な知識をねじ込むだけでなく、「哲学とは考えることを学ぶことである」と偉い哲学者が言ったみたいなことを聞いたことがあります。研究室の裏側に置いてある本を暇で見たら、博士課程の人の就職についての本があって、そこに書いてあったのは博士課程を出た人は自分の知識で勝負しなきゃいけない、そうすると自分の研究のことしかやれない人、つまらない人になっちゃうけど、そうじゃなくて自分の持っているもっとコアな能力・資質を分析して、筋道立てて考えてというそういうコア能力っていうのをしっかり培ってそれをアピールしましょうみたいに書いてあったので、ちょうど思い出しました。大学教員というどうしても

研究者と同時に教員という性格の中で、そういうコア能力を培っていくってことが結構教育者としての役割なのかなっていうふうに私はちょっと聞いて解釈したんですが、そういう理解で合っているのでしょうか。

菊地：コア能力っていうのかな、それそのものではないかもしれないけれども、この点は前任校に勤めているときに意識していました。東大でもそうかもしれないけれど、前任校では大学から大学院に進学する人の割合は非常に限られていました。多くの人たちは卒業した後、研究を離れた別の仕事をするようになる。とはいえ大学院進学希望者もいるから専門性はおろそかにしたくない。そういったときに、ゼミをどう運営するのか。ただ単に歴史学、中世史の知識を吸収してもらう、あるいは研究手法、歴史的思考法を吸収してもらうのではなくて、例えば情報処理能力であったり、あるいは異なる見解が複数提示されているときに、それをどう整理して自分がどれに従うと判断するのかとかといった、情報の運用能力あるいは思考態度であったり、これらを身につけて卒業していったほしいなと考えてゼミを設計したつもりです。それがうまくいったのかどうかというのは卒業生の人たちに聞いてみたいのですけど。この点については今の、移籍してからのゼミでも基本的に同じようなことを考えております。今のゼミ生でも、大学院に進学しようとする学生は限られている。ですので、それでもなお大学時代にゼミに出た意味があったなと思ってもらえるように、何とかしたいなと思います。

須田：ありがとうございます。

菊地：大学院ゼミの場合はそれとは違って、史料をちゃんと読んでくださいというような、職人としての修行みたいな性格も強くなってくる。これは否めませんが。

クリオ：ありがとうございます。その他はどうでしょうか？

岡本：東京大学に赴任しての何か授業を持った時の印象や、学生たちの印象で思った点について、良い悪いではありませんが前任校との違いはあるか、それから先生がここで教わっていたときと比べて何か気になるようなことがございましたらお聞きしたいです。

菊地：実際一つ、ここの雰囲気がちょっと寂しくなっているっていうのは感じています。しかし何でかと言うとおそらくコロナ禍だからなんですよ。さっき雑談の場で、談話室がどれぐらい機能しているのかということをお聞きしましたが、ここの利用者が減って、かつ大学院生に限られてきてしまっているような印象があります。そうですね、学部生と大学院生との繋がりが——自分が学生だったときに実際どうだったかは別としても、自分が覚えている、もしかしたら美化されているかもしれないイメージと比べると——少し寂しくなったなというところはあります。でもこれはこの後いろんな規制が変わっていけば、変化があるのかなと。

授業をやっている受ける学生の印象の違いっていうのはどうだろうな。パブリッシュする紙面でどっちがどうだということは言っていないものなのかどうか。

岡本：受講生の数はどうですか。

菊地：ゼミに関しては大して変わりません。僕、前任校ではあまりゼミの学生が多くなかったの（苦笑）。講義の方に関しては圧倒的に東大の方が少ないですね。例えば前任校での概説だと百何十人っていうのを前にやっていたのに比べると、今の特殊講義は多くて出席者3、40人ですから、やはり違いますね。逆に院生の数は圧倒的に東大の方が多くて、これはもちろん個々の指導は大変だけれども、楽しさにもつながっています。

クリオ：ありがとうございます。今度はより広いお話になりますが、日本の大学における西洋中世史の立ち位置について伺いたいと思います。近年、西洋中世史及び前近代史全般に言えると思いますが、例えばいろんな大学で古代と中世でそれぞれの先生が着任されてカリキュラムを組むのではなくて、前近代史で先生が1人という大学が増えてきています。あるいは高校の歴史の授業で歴史総合という科目が必修になって、従来の世界史が必修ではなくなり前近代史に触れないまま大学に上がってくる学生が増えてくる。そのような状況で、前近代史の立場がなかなか難しいものになってきていると個人的には思っています。そのため、前近代史に触れていない学生に対してどのような取り組みをするのが望ましいと考えるかというところと、これはポストの問題もありますが、大学教育において前近代史がひとまとめになることに対する懸念について、この2点についてご意見を伺いたいです。

菊地：これは非常に答えづらい問題です。まず前提として、これは僕個人がどうすべきだと考えているのかというご質問なのか、それとも学界としてどうすべきだと考えているのかというご質問なのか、どちらでしょうか。

クリオ：あくまで先生のインタビューなので、個人的なお話を伺いたいのですが、そちらをベースにしつつ、関連があれば学界全体についてもお聞きしたいです。

菊地：わかりました。今の僕の立場だけで言えば、このあと教育システムが変わっても、おっしゃったような前近代——この言い方は「じゃない方」といった響きを感じてあまりよくないような気もするのですが、差し当たり代案があるわけではありません——を勉強しないまま僕の授業を取りに来る西洋史学の学生は極めて少ないはずなんですよね。というのも、まず東大の入試で文系ならば社会科2科目を受けなくちゃいけない。その際、日本史探究、世界史探究、地理探究から2つ取るにあたって世界史探究を選択する受験生は——仮に今の割合からあまり変わらないとすると——それなりの数がいるはずで、その場合は前近代史も履修している。なおかつ彼らはまず教養課程に入るわけですよね。教養課程で何らかの勉強をした上で、西洋史学に進もうということをして2年の前期で選択する。2年の後期には西洋史学研究入門を受けつつ、3年生以降のこちらでの勉強に備えていて、そして本郷の僕らの方に来る、という流れになるじゃないですか。そうすると少なくとも、教養課程の中で何らかの西洋史系の授業に触れたから西洋史学を選択する、というような背景も想定しうるし、あるいは西洋史学研究入門を受講し、その単位を取るために勉強する過程で、西洋史の概説的な本なんかは読むだろう、と期待するわけですよ。そうすると3年生に実際僕らが本格的に教えるような状況になったときには、前近代のことに触れたことがない学生の方が少数派だろう、と、ここの場合は想定できるわけです。

ただし個人的な話ではなくて、全体的な問題としてどう捉えるか、となるとこれは非常に難しいお話になるかと思います。仮に僕が前任校にいたときであれば、1年生でやる西洋史概説のやり方は変えざるを得なくなっていたらと思う。少なくとも世界史Aで聞いたことがあるだろう、ということを前提にはできないという組み立てになるはずなので、初めて聞く内容が多くなるということを意識して、説明する事項を減らすなり、構造的な話を工夫するなり、何らかの授業設計変更を行い、その上で専門的に西洋中世を学ぼうと思ってもらえるような工夫が必要になっただろうとは考えられます。あるいは、例えば理系受験だけれども駒場で勉強しているうちに西洋中世史に目覚めました、という学生が出てくるような状況を望むならば、駒場での出張講義のやり方も工夫しなくてはならないでしょう。なんとも歯切れの悪い物言い聞こえるかと思いますが、学界全体に向けては、津田（拓郎）さんがすでに「若者の西洋中世離れ」

について問題提起をなさっておられますので¹⁹、僕を含め学界に身を置く個々人がそれを真摯に受け止めて反省的に動かなくてはならない、ということは間違いありません。

ちなみに教育の枠組みなり講座なりが「西洋前近代史」のように大きなまとまりになること自体には良い面もありうると思っています。というのも「古代」や「中世」といった既存の時代区分にとらわれない新たな歴史の見方が生まれてくるかもしれないからです。もちろんそれは、従来古代や中世を別々に研究・教育してきた人たちが協働する場としてそうした枠組みが作られた場合の話であって、枠組みを作る際に、古代史・中世史各1名だった教員ポストが、1人のポストに統合される、ポスト数が削減されるのは困ります。ただしこの各大学のポストの問題は非常にナイーブです。これに関しては僕が安易にとやかく言えることではないとも思いますが、まずどういうロジックでポストが減るのかというところに問題があります。例えば単純に人口が減る、あるいは就学年代の人口が減ると、学生数が減るのだから大学の規模も縮小される、といった経営規模の問題として、歴史に限らずいろんな学部学科の教員数が全体的に縮小されざるを得なくなるのならば、極端な話、人口増加の他に解決策はないようにさえ思ってしまうわけです。そうではなくて、(ポストを)削減してもよい学問として西洋前近代史がターゲットになり、ポストを減らそうと動くのだとしたら、学界を挙げて自分たちの学問の存在意義というもののアピールする必要は絶対にありますよね。そうしたときにおそらく、僕がさっき日本における西洋中世研究の意義云々について質問を受けて答えた内容では絶対に弱いんです。純粋な学問的意義だとか、あるいは日本史研究にも資し得るのだとか言ったとしても、削減を求められないかといったら自信がない、学界の外にアピールするロジックとしてはすごく弱いということは僕も自覚しています。研究者になろうとする人たちだけではなく広くパブリックに、パブリシティに対して訴えかけるような(西洋中世研究の)意義の主張というのは絶対的に必要になると思います。

そうしたときにどうすればいいのか。アウトリーチ活動が重要になるんだろうということは疑いがない。古代でもそうかもしれないけど、いろんな形で西洋中世的な「要素」に関心を持つ人はいっぱいいるわけじゃないですか。様々なエンターテインメント作品、ハイカルチャーのものであれサブカルチャーのものであれ、中世的な要素を入れて作品を組み立てるということは長らくあるわけです。いまだにそれはある程度市場を獲得していて、そこを入口として、西洋中世は現実としてどうだったんだろうか、ということに関心を持つ人はいる。そういうわけなので、そうした人たちにどうアウトリーチしていくのかということは積極的に考えた方がいいと思います。

クリオ:ありがとうございます。次はそういった話を聞こうと思っていました。大学外の情報発信について、漠然としたことでも何か構想はございますか。

菊地:僕自身は全くやってないのですが、SNSをやっている研究者の人たちがたくさんいるということは聞いていて、そういった人たちが西洋中世に関するいろいろな情報発信を行っている、あるいは研究者ではない方々と中世に関するコミュニケーションをとっていると

¹⁹ 津田拓郎「問題提起：若者の西洋中世離れ——通俗的西洋中世像と中等教育における西洋前近代の取り扱い——」(西洋中世学会第12回大会、2020年10月3日)。当日の資料は津田氏のResearch Mapで(https://research-map.jp/Takuro_Tsuda/presentations/30267229)、報告要旨は西洋中世学会のウェブサイトで(<http://www.medievalstudies.jp/wp-content/uploads/2020/09/2020-AGM12-PaperAbstracts.pdf>)確認できる。

ということなのだろうと想定していて、それはとても良いことだと考えています。あるいはエンターテインメント作品に監修という形で関わっている方々もいらっしやいますよね。監修、あるいは作品に対するコメンテーターとして積極的に関わっていく方々もいて、それもすごく意義があることでしょう。他方、自分自身がそういったことをできるのかどうかはまだ想像が付きません。カール大帝、シャルルマーニュが題材になったような作品が出て、そのときにコメントを頼まれる、あるいは監修をお願いされるなどということが現実的に出てきたときに、自分がどう対応できるのかというのは、今はあまり想像できません。やるやる！となるのか、自分ではできません！となるのかはわかりません。

そうした（学界外との）関わり方というのも一つでしょう。でもそれだけでは、やはり学問としての西欧中世学の生き残りを図るのには弱いのではないかな。西洋中世に関心を持っていただけの、そして何か関心を持った人が疑問に思ったことに答えられる、そうしたアウトリーチ活動が一つあるとすれば、もう一つ上の段階のアウトリーチ活動と言っているのかな、西洋中世学という学問そのものに関心を持ってもらえるような、「そういうことをやってるの面白いですね」と、学問的な成果自体を面白がってもらえるようなアウトリーチ活動もおそらく必要なんだろうと。先ほど述べたような SNS でのアウトリーチ活動でもすでにそうしたことは行われているのかもしれませんが、今既にあるメディアの中でどれが一番近いのかと考えると、おそらく新書なんだろうと思いますね。

皆さんもいわゆる初学者だったときって、いろんな新書を読んだんじゃないかと思いますし、あれって書き手の素性を見るとやっぱり一流の研究者であったりするわけじゃないですか。やはりいかに自分が専門で培ってきた学問的な英知を、その学会の外側、学界の外側にいる人たちに、知的興奮を失うことなく、あるいはむしろ盛り上げるような形で、薄い本の中に盛り込んで提供するっていうのは非常に高度な技だと思いますね。しかも薄いと言ってもある程度のボリュームがあるので、読者になるほどと思えるくらい十分な説明も可能であるという。誰にでもできることじゃないんですけど、新書の文化というのは非常に良いものだと思います。自分はまだ経験がありませんけれども、いつかこういう貢献ができたかなとは考えています²⁰。

²⁰ 終了後の雑談の中で、地方出身者からは、地方の規模の大きくない書店や高校の図書室、地域の図書館でもアクセスが可能な新書を通じて一線級の学術成果に触れられることが、地方の高校生たちにとって大きな意味がある（あった）、といった話が出た一方、新書は長らく存在する媒体であるにもかかわらず、現在の「歴史離れ」、「西洋中世離れ」といった状況が出てきているのだから、新書ではだめなのではないか、という意見も出た。どちらも傾聴すべき意見である。もし新書という媒体に希望を持ち続け、専門書・専門論文よりも広い読者層に届けようとするならば、例えばイヴァン・ジャブロンカ『歴史は現代文学である：社会科学のためのマニフェスト』真野倫平訳、名古屋大学出版会、2018年）がその提言の前提として言明することを踏まえた上で、叙述を工夫することが必要になるだろう：「（歴史学や社会科学にとって）書法（エクリチュール）は単なる『結果』の伝達手段でもなければ、研究が終わるやいなや大急ぎでかけられる包装紙でもない。それは研究そのものの展開であり、調査の本体である。知的な楽しみと認識能力のほかに、さらに市民的な次元が存在する。社会科学は専門家のあいだで議論されなければならないが、重要なのは、それがさらにより広い読者によって読まれ、評価され、批判されうることだ。書法によって社会科学の魅力を増すことは、大学や書店における社会科学嫌いを和らげる一つ的手段になりうるだろう」（同書2頁）。ジャブロンカの提言については、福元健之／長野壮一／鈴木重周「イヴァン・ジャブロンカによる提言への応答：歴史叙述の可能性をめぐって」『西洋史学』

クリオ：ありがとうございます。本日の菊地先生のインタビューに関しては、こちらで終わりにさせていただきますと思います。本日は貴重なお時間いただきありがとうございました

一同：ありがとうございました。

菊地：お疲れ様でした。

参加者一覧（肩書は当時）

聞き手・編集者 長澤 咲耶（D1）

参加者 奥田 弦希（D2）

蔡 男（D2）

十川 雅浩（D2）

岡本 勇貴（D1）

須田 りょう太（D1）